

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑳

隣組は戦時下の銃後を守るために、官主導でつくられた最末端の住民組織で、全国に町内会、部落会が整備された昭和15(1940)年、その下部組織として近隣の約10軒を単位に設けられた。食料・衣料・燃料などの生活物資の配給、出征兵士の歓送、バケツリレーなどの防火演習、戦時政策の宣伝普及など、隣組は住民生活のあらゆる面に深く関わり、それらの情報を伝達する回覧板が頻繁に回された。

「トン トン トンカラ」と 隣組」。岡本一平作詞・飯田信夫作曲の「隣組の歌」は昭和15年にラジオ

の歌」は昭和15年にラジオ

永井刀専の隣組回覧

庶民生活絵を添え記録

の庶民の生活がイラストとともに記録された貴重な歴史資料がまた一つ、現在に伝わった。

(学芸課長・井上淳)

〈8月2回掲載します〉

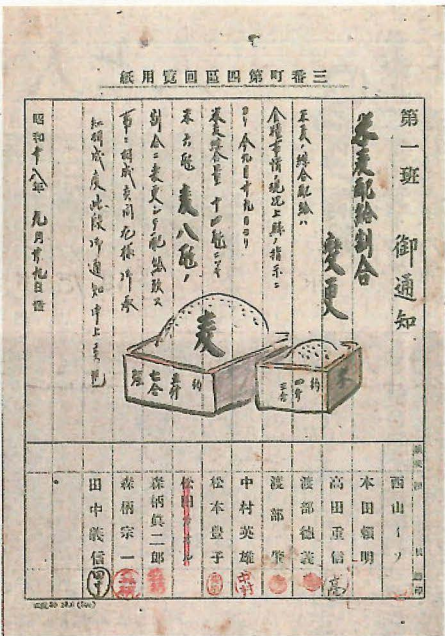
× ×

「永井刀専の隣組回覧」

は、10月21日まで、県歴史文化博物館(西予市)の常設展示室で展示中。

の用紙で、三班分の回覧を一手に書いていたのだ。残されているのは、昭和18年6月4日から20年5月4日までの577枚に及ぶ。掲載した回覧は18年9月29日のもので、米6.5に對し麦8.5に配給割合を変更することを伝えている。イラストでは、米は小さな升におさまっているが、麦は大きな升にあふれんばかり。どのように変更されたかは一目瞭然(りょうぜん)である。

この回覧が回された昭和18年、山本五十六連合艦隊司令長官がブーゲンビル島上空で戦死するなど、戦局は悪化の一途をたどる。その後の回覧では米麦さえ確保できず、代替品しか配給されない日も増えていく。戦前の松山を描いた木版作品と同様、隣組回覧も自らが手がけた作品として、刀専は大切に保管していた。そのおかげで、戦時下



永井刀専が作成した隣組回覧、昭和18(1943)年、県歴史文化博物館蔵